



本朝文鑑

表四
表五

5
2229
3



5
2229



中朝文鑑

表類

出口天滿宮文

花起請

報恩表

教令類

双林寺修石碑教

洛柿舎制札

書狀類

谷戸庵付者書状

贈在雲危人書

洛書

申白紙状



靜居藏

本朝文鑑

報恩表

東花坊

ちを坊に結ぶ事一十一年を所たすもなかり
 ありて能諸のいなり事いあわわくきしち花坊の國へ
 東路のこくと遠かきとまきし侍とまきしの人
 と命をれりていふにまきし一十一年はるめも
 あらひ武のの目よりまきしまきし諸のり人
 きし十哲のふのいあわわくきしち花坊の國へ
 一命一命一命一命一命一命一命一命一命一命
 あらわあもいふにまきしまきしまきしまきし

のたあ。よとまきしそりて能諸の才一十一年
 湖南のまきしあわわくきしち花坊の國へ
 塩将とかきしそりて能諸の才一十一年
 けりれまきしまきしまきしまきしまきし
 の感と保しそり人まきしまきしまきし
 百々の新とまきしまきしまきしまきし
 そりて能諸の才一命一命一命一命一命
 町とまきしまきしまきしまきしまきし
 のりまきしまきしまきしまきしまきし
 けりれまきしまきしまきしまきしまきし

之報ノ實地ナレ増シテ碑面ノ文字ノ數ニ百十ノ因テ配分
セレ起結ノ文鑑ハ此等ニ致ラシ或ハ舊門ニ元金也ノ名
ヲ奉リテ先達ノ子ハ此表ノ辭美ニシテ石碑ノ額也ハ
此表ノ教ニ急ナリ或ハ師恩ニ功名ノ一對ハ露雲ノ二子
奇絶ヲ見テ文ニ交アリトテ移スレ但シ不_レ^レ鹽將_レ角_レトハ
禪録ニ朝暮ノ飯ヲ云_レテ一子ニ庵ハ盧_レ全_レ詞ナリ

教令類

雙林寺修_レ石碑_レ教

渡部_レ仁

有司_レけ_レ流_レり_レぬ_レせ_レ父母_レあり_レ子_レあり_レ師_レあり_レ弟子_レ
あり_レ何_レを_レあ_レて_レ父母_レの_レ恩_レと_レ思_レふ_レは_レあ_レり_レ也_レ

師の住_レむ_レひ_レん_レや_レ專_レに_レ地_レ誌_レの_レ事_レあり_レて_レた_レめ_レ師
と_レし_レ武_レの_レ甚_レ進_レ庵_レ一_レ丈_レ二_レ方_レ葉_レの_レ住_レと_レか_レて_レ其_レの
才_レ子_レハ_レ濃_レの_レ東_レ華_レ坊_レ二_レ方_レ盧_レ一_レ實_レの_レ法_レと_レ傳_レふ_レ世_レを_レ傳
ふ_レ師_レの_レ住_レと_レし_レら_レる_レや_レ才_レ子_レ此_レ名_レと_レを_レ傳_レふ_レん_レや_レ此_レれ_レ
實_レ永_レ成_レ實_レの_レ事_レ洛_レの_レ双_レ林_レ寺_レに_レ傳_レふ_レの_レ碑_レと_レ造_レり_レ
そ_レ地_レ入_レる_レ行_レの_レ功_レと_レを_レ傳_レふ_レん_レや_レ自_レ十_レ二_レと_レや_レて
其_レの_レた_レる_レ事_レと_レを_レ傳_レふ_レん_レや_レ今_レに_レ年_レの_レ命_レ或_レは_レ其_レれ
い_レや_レり_レや_レ野_レの_レ双_レ林_レの_レ事_レと_レを_レ傳_レふ_レん_レや_レ其_レれ_レ
行_レを_レ傳_レふ_レん_レや_レい_レや_レり_レや_レ天下_レの_レ行_レと_レを_レ傳_レふ_レん_レや_レ勸_レ化_レ一_レ成_レの
ち_レと_レを_レ傳_レふ_レん_レや_レて_レ其_レれ_レは_レ祇_レ園_レの_レ事_レと_レを_レ傳_レふ_レん_レや_レ今_レ

のりは供佛の料とけいしそきく鎌掃のりききりん
とおちりぬ向後うにけきまふのりききりん
碑文の秘法とまらぬやうて信心不迷の志とけいん
年くへ碑面のうきとあしそ月くへ供佛の燈と
かてけいしそききりんの志とあしそ月くへ供佛の燈と
こくへ月上院の利重園は親王の令旨にかゝりて渡部
けいりけい教にうりてふくけい地と施しそききりん
ね云北教の傳をなかり文法ニ致してまは親王の令旨
ヲ促せり去り北書ノ教スルハ年々之月十二日ヲ以テ
東山ニ聖直ノ會式アラシテ水ヲ後東ノ内ハニ

催促せり誠ニ此諸ノ名ヲラシハ誰カ合信ノ志ヲ存セ
然レニ祥園ノ墓金トハ石碑造立ノ時ノ地次々イ供
佛ノ料トハ此時ノ香華料ナリけり及ニ年月日ノ
ラ重子テ信心不迷トモ云レたり或ハ一巻ノ葉トハ
祥詔ノ一花五葉ヲ借ワテ万ノニ子ヲ錯綜セシ花
一虚實ハ奇絶ノ意對ト云レ但し出山佛ハ故云羽ノ持仏
ナルカ我師ニ附屬アリシヲ再ヒ此寺ニ奉納セリ或ハ石碑
ノ謎文トト一軸ノ秘注ヲ内陣ニ残セル事曲ハ碑文類ノ下ニ
但し利重園ハ山莊ノ名ヲ差シテ當時ニ諱ノ恐レアリ

落柿舎削札

仍諸奉行

向去来

一 我々の世流しあるを
 一 世の世流しあるを
 一 新屋流しあるを
 一 大衛とかくし
 一 外にかくし
 一 魚鳥とかくし
 一 速くかくし
 一 たくとくし

一 障り此の世流しあるを
 一 大の世流しあるを

右條

和云此令ハ四虚一實ト見レシ去レハ蕉内ニ此人アリテ其
 性ハ殊ニ篤實ニシテ常ニ言語ノ虚ニ遊レリ故ニ始ニ條
 フ云クシテ後ニ條ヲ與スルノ去レハ此付ハ落柿舎
 ニ五七輩ノ内人來リテ故爾ト同シク遊レリ其ノ癖ヲ
 云レリトフをモ公表ノ制トハ見レハカラス誠ニ洛陽ニ去来
 アリテ鎮西ニ俳諧奉行ナリト故云羽モ稱シ給レハ宜シ
 也

叙概ノ大節ト云ルコリ汁概以下ノ次節ニ節ヲ定メスレモ
ニ福壽寺八作ト云ルハ當國ノ高田ニ名ヲ知テ家紋ハ卍牛
ナリトカ然レニ此作者ヲ依度入道ト云ルハ例ニ我師
ノ狂名ナカラ其ノ際國ナハナレ且シ我師ハ禰ノ庶流
ナリ

贈丸栗老人書

と巻下

昔は信長よりゆりぬ老人とむいー我等のいけとてきて
町にた西本の子よとむいーしその子に陸夜あり故より
過角と竹凡痛よあれと其家の能説とはむいーさ
入子子の凡雅とむいーしその子に流る聖夜はし金玉

けいりしむいーしなふいーしは詢ありはむいーし丸栗の
とらや丸栗の授記しむいーし西本と西本の後
ありもありしむいーしありむいーしむいーしむいーしむいーし
むいーしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーし
能説もむいーしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーし
むいーしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーし
ありしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーし
そのありしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーし
人らむいーしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーし
ありむいーしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーしむいーし

石見三金の
三勝の如くとのをけりてはるるをては此勝を
今中これあるの静にてもははりてはるるをては
人向一のま化はてのてはるるをては此勝を
中へてのてはるるをてはるるをては此勝を
もやあらはるるをてはるるをては此勝を
吾月掃りてはるるをてはるるをては此勝を
よらるるをてはるるをてはるるをては此勝を
危人もはるるをてはるるをてはるるをては此勝を
とらるるをてはるるをてはるるをてはるるをては此勝を
とらるるをてはるるをてはるるをてはるるをては此勝を

のりてはるるをてはるるをてはるるをてはるるをては此勝を
阿弥陀佛のてはるるをてはるるをてはるるをては此勝を
れ云此書ハ殊ニ實地ニシテ文章ニ鼓舞ヲナセルハ
教ユルニ親切ノ如ク況ヤ以雅々筆情ヲ尽ル禪門ノ
法語ノ魏元ナルハ似オラズ云レハ師ノ文章ニ戲言狂語
ヲ昏キヤレト故莫古典ヲ用ケルト總テハ其時ノ宜キニ
随レハ其レラ虚實ノ應用ト云ナリ然ラズ此書ノ所用
ヲ見テ虚實ハ水波ノ傳ルヲ知ラハ始テ文章ノ自在ノ
人ト云ハ誠ニ此書ハ人向ノ進退ヲ云イテ自己ノ能諾ニ明ナリ
ト見ルヘシ但シ危栗ハ却テ今町ニ注ス此地ハ古ノ直江津ナリ

武陵の芭蕉庵ありて阿蘇と杜律と云々
 鷓鴣粒と鳳凰枝の平反も所々にありて故
 かく作らるるをさふ彌君註と云々に語倒
 競言と云々の如くいへるのまことに奇怪と云ふに
 此れを倒語の所以ありと流俗と云ふ一語人
 らわすにこれを錯綜顛倒の法とて上と下へ
 する名人の句法と云ふ言へて顛倒の所以とありて
 人亦さるるに阿蘇の減後ある百人一それ新康の言と
 るれ秋野の白露と倒おまをりしるや和屋といは
 れんと流俗と云ふ一奇人なるにあり家の秘妙

一多と流して是も自若と秋の中と上下へ
 名人の志と云ふの如くして倒語の所以とありて人
 亦さるるに和屋の通情と云ふに杜陵の軽字の飛語と
 云ふ怪も錯綜の所以と云ふ一くお康の言のまじ
 と云いておを倒お表の所以と云ふ一多と博字を
 金銀と云ふて錯綜倒語の理處とありて博知の
 例の字油と云ふて飛語多少の所以と云ふん也
 此れは流俗の如くも名人の情と云ふと云ふに赤人
 の一の奇いれがのうまをりてかんに西行は解
 の一の煙を風よあひく此五つ子とねらんに一実も

ハ字又の商ひしと云ふ

狂云此ニ論ハ本ヨリ一篇ノ趣意ナルラ張子存子東西
ノ銘ニ效イテ東西ニ筆ノ號ヲ出セリ去レハ前論ニハ
唐天竺ノ博學ヲ筆ケテ拓華業存モ其意ヲ知
ラハ儒仏ノ言詔ハ何カ暗カラント但レ甘陀寺ト云イ
龍宮城ト云ル博學ヲ嘲ケル狂語ナカラハ仲ノ希有
ヲモ取合セタリ然レハ其人ヲハ白猿ト云イ其我ヲハ
岩猿ト云ル例ニ俳諧ノ筆格ヨリ虚實ノ所ヲ見ル
一キナリ後論ハ和漢ノ風流ヲ合セテ古人ノ心腸ヲ知リ
タト古人ノ言語ヲシテタルトノ損益ノ向ラ云ルナリ

去レハ杜律ニ秋直ノ詩ハ鸚鵡喙餌香稻粒凡几棲老
碧梧枝ト其詔ヲ直ニ云フ時ハ枝ノ字ハ支脂ノ韻ナリ
儻ナク凡堪忍スレ前ニ香稻ノ粒ト云ハ決シテ粒字
ヲ死字ト云レシ次ニ朝康カ白露モ秋ノ野ニ凡吹レク
白露ハト上ラ下ニ置ク時ハ白露ハ絶ニ三粒ニ粒ナラン
然レラ上下ニ轉倒シテ凡ノ吹レク秋ノ野ハト白露ヲ
上ニ持ハセタレハ其野ハ露ノ置乱レラニ秋モ傳モル
ヤウナラシ然レハ死活多サノ四字ヲ以テ無尽ノ詩ヲ
注シ山セル筆力ノ神ニハ敬慕クハレ況ヤ西行ト其人ノ論
撰佳ホモ同シク判者モ同シキニ兩人ノ喜怒ノ各別ナリ

本用反鑑五

六

空ニ之仙ノ本情ニ遠クシクハ拈花會衆ノ意トテモ千
歳ヲ今ニ見送サシヤニ論ハ總テ所以ノニテラ註
テ儒仏兩道ノ至論ナルニ商ノ字ニ又三早ヲ敬ヒテ凡ル
人ノ理屈ヲホトキタル虛實ノ文鑑トハ多クノ言又ナリ

解類

念仰解

法慈上人

世ノ一念十念ノ往生と云フハ念仰と云フハ
Pハ信アリと云フハ念ノ持スルアリと云フ
ソノ一念十念と不定と云フハ信と云フハ
あり信と云フハ念ノ生と云フハ念ノ成と云フハ

一念と不定と云フハ念ノ念仰と云フハ不信の念仰
と云フハありと云フハ阿彌陀佛ハ一念ノ一分の往生と
ありと云フハ念ノ以て往生の業と云フ也

狂云此文ハ一言万説ニモ在リテ此トハ少シ相違アリ
去レハ此段ハ決定ノ二字ヲ解セントテ信行一致ノ
念仏ヲ示シ玉ヘルヲ誠ニ一念ニ一度ノ往生トハ淨土ニ
ノ事云々ニテ十念一念ノ直説ナルニ

九品解

并序

是仰序

却に東江津の過角ハ其父の業と云フハ

比丘尼優婆塞優婆塞夫ハ未脱未折敷ニ居テラヒ
テ品弱ノ向和ニ同ヲ悦ハシメ燒豆豆腐ノ致子ニ淚
ヲコホシテ勸ムル功德ハ甚ニ成仏ト云言テルレ去レト
釈迦仰ハ有柄ノ追善ト説キ玉ハ達ユルハ向ニ無功
徳トモコトサレシ中佛諸宗ニ此等ノ敵ニラ佛旅園料理
ト名ラツケテ如何ニモ中令ノ振舞ナルレ

下品

團子 新茶
蓮飯 餅搗
釈曰十王ノ勸メモ濃ハフダ為トハ賤男ノ讓テカラ仏
ノ五千金巻トテモ此道理ニハ過カラン去レハ極ホクト

ニト濃ハスハ何ヲ極ホクモシ濃ヲテ極ホト雷怖テ極ホ
ナリ春ハ花ヨリモ團子ト説セラレ甘々ハ時鳥ノノ声
モ新茶ノ香味覚コノ可笑シケレ然モ魂奪ニ心ニ女キ
仏達ナレハ三日ハ濃フタリ飲フタリニテ指シテ雷怖ホトハ
親ハスカレ珠ニ蓮飯ハ甚、勻ヲホメテホクノ仏ハ者ニモ
及ハス手^テ出スルモ亦極ホナリ餅搗ノ比ハ亡人^{ナキ}未ル夜
トテ魂奪ルワナモ都ニハナキヲ執後ノ方ニハ獨スル者
トテ之的月ノ好キホラ^{ナキ}ト云フモノ附タラハ彼ノ
赤鬼モ心ヤハラキテ聖コト天ノ為ア^レカレトハ思フニレ
然ルラ仏家法ニ任セテ極ホク下品ニ置タレト佛語

木村大藏

九

家ニハ上品ノ馳走ト云イテ饒久此四題ノ中ニ酒ト
 者^{ニシメ}大津モアラハト思フハ叙文ノ御房ノ僻直ナラシカ
 狂云此等御ハ全ク靈雜ナカラ十二題ノ註解ハ解体ト云
 一ナナリ去レハ九品ノ次牙ヲ分ツニ或ハ上品ト下品トヲ
 云イテ中品ハ有無ノ二子ニ互照セル或ハ朱椀朱折敷
 ラ經文ノ語勢カニ知青セタル或ハ下品ノ四題ヲハ逐ニ
 注釈レテ一々ニ樂^ウ字ヲ富セタル或ハ歲暮^ニ全條
 ニ徒然^ナ料ノ詞ヲ借ツテ越後ノ方ト取ナシタル況ヤ結語
 ノ任^ト言ナル比々々俳諧ノ筆法ヨリ出テ虛實ハ水上ノ
 胡盧ヲ轉スルニ似テ^ン但シ是ハ房^ハ先師ノ函号ナリ

養生主解

古荅坊

ひりより新およ^ニ世相と^ハあおあり^テ人^ハ鬼あり^トあ
 人ありはれ^ト月おの掛^ハけあり^テ隣^ノお^ハ抑^ル
 音と^ハ津^ハ鳴^ルと^ハあ^リる^ハな^れを^ハ鬼^ノあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハ
 あれ^ハも^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハ
 と^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハ
 遊^ハを^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハ
 器^ハ用^ハも^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハ
 飛^ハて^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハあ^リる^ハ

の人此そくをいへて歌あつらんあいらひくといふ鉄買
此ききくの一ノ首ふかゆふふより富貴にわらはれ
かたてへ貧賤とくあつさあいらく業厚のほふ
そわにまをゆく敵の名よふれ秋らおそまのさう
も子機万捕のまをわとちや竹の皮一枚ふけられ五味
八珠の膳とてあれておろし草のおひとあられ世
のふふとちよまおひのおやうふふふてて中念中お
れまう部とあつらんまをく老業すうとやけいあつ
あつて秋とふふとくまむふふとく大れとの鬼神
のゆきの果の柳ともえとちまはらるるまをいふ

在云此解ハ和漢ノ諸抄ヲ引テ儒仏ノ教ヲ歸ニ喩ヘタル殊ニハ
解体ト云ハレシ去ル混流ノ字ニ形容シテ幾多ノ故者又古語ヲ
用イタル寧クハ其ハ書ニ其ハ言アリヤト駁ククレシ去ル宋辰守ノ
在對ヨリ或ハ花紅葉ノ風流ナレ或ハ鬼神ニ掛ケラ對シテ
結語ハ世情ノ溫和ヲ云ル誠ニ俳諧ノ律格ヲ傳ヘ誠ニ文法
ノ虚實ヲ知リテマ焦ハニ此作者アリト云ヘシ但シ虎角ハ
相場中ニシテ依渡ノ國ニ往返ス素生ハ江東ノ人ナリトソ

傳類
正直ニ房傳

西川上人

とる圖とすやん中比その圖よあやの偏地里とち

いん中のおれ一果あんあの人け指は寂し一とせの
こゝろあふししあふはらうに神もはらうらあひ
あうけうしとあの人と教誨と一詞とをけいひ
と酒れのはゆらうてさかかんさしはらうに
うらうけんとせゆくは

れ云北傳ノ法師ハ凡骨ヲ離テ世ノ眼力ニ及サラン志ハ唐ノ
傳灯録ニモヤ名ノ隱逸傳ニモ北如キ狂僧アリテ或ハ
賢人トモ狂人トモ傳字ノ傳後ニ依ルキナリ誠ニ孔子
春秋ハ百世ニ師ルキ筆法ナラヤ或ハ湖明ト西行トハ
和漢ノ風人ヲ取舍セ或ハ一休ト増智トハ言ニ狂僧ノ類

ナラン然ルラ教誨ノ二字ニ依ラハむモ市中ノ大隠氏祐ス
一し但し作者ハ各執が氏ニテ美濃ノ山縣ノ三座ナリ

白狂傳

東老坊

白ねらよと處きしあは世と或ハ狐の子ありとも
しあひあふとやせよとあはらうの山寺のお
怖くおまらうし秋のまらう年のおしつ
とらある三聖部の夕れに蜻蛉とおひつらも鐘樓
のほられ本あられ何んちくてあそいあはらう
のわらもあやうらあひあはせめとせめ

幸ら申風と物とる石と頸物史と何と云ふ事あり唯
らくせとやあはほふねあふらけしやといふ事あり
或は云ふものなまりてけに松とあやこて後の所あり
やしりらむといふあにけ記とあやけのくさる事あり
ね云い記ハせし傳字シテ正馬の語モ有ルキカ去レト
此老人ハ俳諧ノ中魚ニシテ芳野山ニサ化ヲ詠レ偶田川
ニ鳥ヲ吟ス當時正風ノ祖ト云ハレ然ルニヤノ各ニ寄
セテ方圓ノ松ヲ形容セル老ノ需佛覺ノ筆占ナカラ儀
ノツフリノ結語ニ到リテ虚實自在ト稱スレ但此老
ハ晩年ニ俳諧ヲ知レルカ自己ノ短冊ヲハ燒捨ケルトソ

白隠堂記

おひた丸

一臺あり白隠とてくるとくるといふふまゝ聲ふあふれ
し其の流のよめつゝ法御ありて世とまはれて困に
眠てくと暮らじつとくつてやねのあふらけお
ふけとまのあふらけとあふらけとあふらけとあふらけ
おちらほふらねの地ねえ荊棘のちまはれくさる事あり
室に指せん此書とるや四十八段のねひはら一ふ
田方のおととるゝまはれ地人の助力とゆふ事あり
ふ別とてけいやまのまはれけいやまはれけいやまはれ

けりしとてと野々野々乾坤のまはらけの
 風とわたり成りたる御手紙のまはらけの
 あふらにほれのとてとてのまはらけの
 市々とてとてのまはらけの
 第一のまはらけの
 第二のまはらけの
 第三のまはらけの
 第四のまはらけの
 第五のまはらけの
 第六のまはらけの
 第七のまはらけの
 第八のまはらけの
 第九のまはらけの
 第十のまはらけの

けりしとてと野々野々乾坤のまはらけの
 風とわたり成りたる御手紙のまはらけの
 あふらにほれのとてとてのまはらけの
 市々とてとてのまはらけの
 第一のまはらけの
 第二のまはらけの
 第三のまはらけの
 第四のまはらけの
 第五のまはらけの
 第六のまはらけの
 第七のまはらけの
 第八のまはらけの
 第九のまはらけの
 第十のまはらけの

和云此記ハ例ノ筆格ナカラ無心所着ノ体トモ云ニカ但シ
 六老ハ雪ノ異名ナリトシ去レハ六老ノ二子ヨリ起リテ時雨
 ノ二子ニ對シタル教禪ハ其レカ喻ニシテ連一奇ト佛讚ヲ
 争フニ似タレト昇意竟ハ雪ノ時雨ニ勝レリト稱シテ負富
 ノ勝劣ハ文ニ早ノ虚實ナリ但レケニ早ハ仮ニ下捺井
 ニ在リテ般盤古ハ其主ノ能名ナリ

和云此記ハ例ノ筆格ナカラ無心所着ノ体トモ云ニカ但シ
 六老ハ雪ノ異名ナリトシ去レハ六老ノ二子ヨリ起リテ時雨
 ノ二子ニ對シタル教禪ハ其レカ喻ニシテ連一奇ト佛讚ヲ
 争フニ似タレト昇意竟ハ雪ノ時雨ニ勝レリト稱シテ負富
 ノ勝劣ハ文ニ早ノ虚實ナリ但レケニ早ハ仮ニ下捺井
 ニ在リテ般盤古ハ其主ノ能名ナリ

